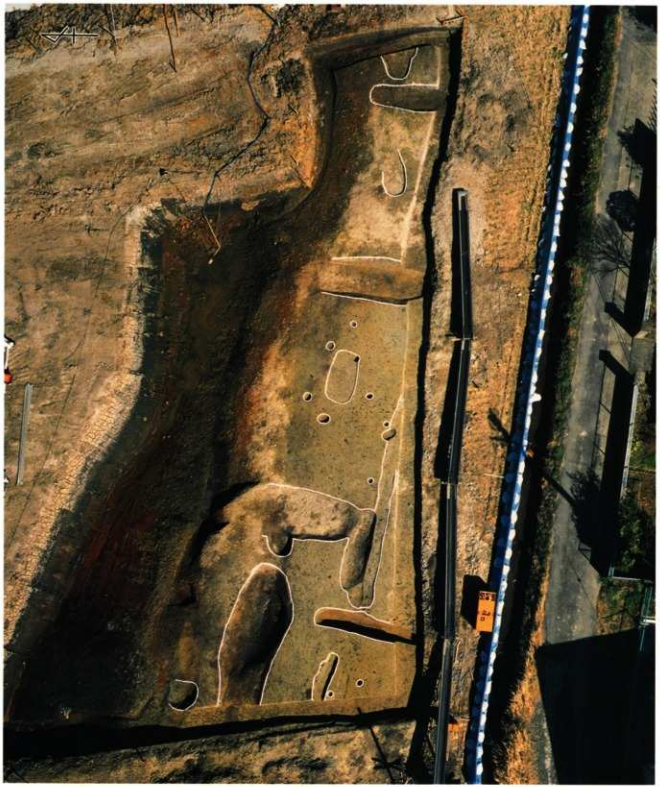
神子地遺跡

創輝株式会社工場用地拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年9月

掛川市教育委員会



神子地遺跡全景

例　言

1．本報告書は、静岡県掛川市逆川（さかがわ）地内に計画された創輝株式会社工場用地拡張事業計画地内に所在する神子地遺跡の発掘調査報告書である。調査面積は約 400 m²である。

2．神子地遺跡の発掘調査は、創輝株式会社の委託を受け、掛川市教育委員会が調査主体者となり、株式会社静岡人類史研究所が調査を担当した。

3．神子地遺跡の発掘調査については、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに「神子地遺跡発掘調査連絡会」を設置し、発掘調査の方法・日程等について協議を行いながら調査を進めた。

「神子地遺跡発掘調査連絡会」の構成は、以下のとおりである。

・調査主体者	掛川市教育委員会	教育長	小松弥生
・調査事務局	掛川市教育委員会社会教育課	課　長	清水　功
		文化係長	宮浦直巳
		主　任	松本一男
		学芸員	前田庄一
・調査担当者	株式会社静岡人類史研究所	所　長	森　威史
		調査部長	片平　剛
・調査指導	静岡県教育委員会文化課	課長	飯田英夫
		指導主事	篠原修二
・開発事業者	創輝株式会社	代表取締役	川口夫美男

4．神子地遺跡の現地調査は平成 9 年 2 月 18 日から平成 9 年 3 月 17 日まで実施した。また、出土遺物の整理と報告書の作成は現地調査終了後の平成 9 年 3 月 18 日から平成 9 年 9 月 30 日まで実施した。

5．遺物の実測およびトレースは松岡美代子・田中久美子（静岡人類史研究所学芸員）が中心となって行った。また、遺物の撮影は片平が行い、空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。

6．本報告書の執筆は、Ⅱ－1 調査に至る経緯については前田が、それ以外を片平がそれぞれ担当し、編集を片平が行った。

7．発掘調査および遺物の整理においては次の方々に御指導と御助言を賜った。感謝の意を表したい。

（順不同、敬称略）

向坂鋼二　システム提案

9．本調査における図面・写真・遺物はすべて掛川市教育委員会で保管している。

10．現地調査における参加者は次の方々である。

岡田行雄、原田 守、鈴木 敬、原田五郎、落合春雄、榛葉治吉、杉森 和、石川とみ、岡本鶴子、榛葉君江、加藤しな

11．整理調査の参加者は両角治子・中島頼英・内藤洋子である。

12．本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

①遺構挿図の縮尺

各図にバースケールで表示してある。

②遺構挿図の方位

特に示さない限り図の上が北（磁北）を示す。

③遺物挿図の縮尺

各図にバースケールで表示してある。

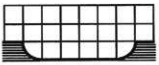
④写真図版の縮尺

遺構・遺物の縮尺は任意である。

⑤水糸レベルの数字は海抜高を示し、単位はメートル(m)である。

⑥遺構の断面状況（長径または長軸に対する断面）の表現は下の図に基づくものである。

皿　状



上に開くU字形

目　次

例言
Ⅰ　位置と環境
　1．地理的環境…… 1
　2．歴史的環境…… 2
Ⅱ　調査の方法と経過
　1．調査に至る経緯…… 4
　2．調査の方法…… 5
　3．現地調査の経過…… 6
Ⅲ　調査の結果
　1．概要…… 7
　2．土層の状況…… 7
　3．遺構と出土遺物…… 9
Ⅳ　まとめ ……24
　　参考文献 ……26

挿図目次

第1図　神子地遺跡位置図…… 1
第2図　神子地遺跡と周辺の遺跡分布図…… 3
第3図　確認調査時に出土した遺物…… 4
第4図　神子地遺跡の調査対象区域とグリッド設定図…… 5
第5図　神子地遺跡の遺構全体図…… 7
第6図　神子地遺跡の土層の堆積状況図…… 8
第7図　第1号方形周溝墓、第1号～第10号ピットの平面および断面図 ……10
第8図　第1号方形周溝墓の西側溝（第1号溝）から出土した遺物 ……11
第9図　第1号方形周溝墓の東側溝（第2号溝）から出土した遺物 ……11
第10図　第2号方形周溝墓の東側溝（第4号溝）から出土した遺物 ……12
第11図　第2号方形周溝墓、第12号溝の平面および断面図 ……13
第12図　第7号溝から出土した遺物 ……14
第13図　第1号土坑、第6号溝・第7号溝の平面および断面図 ……15
第14図　第8号溝から出土した遺物 ……16
第15図　第9号溝から出土した遺物 ……17
第16図　第10号溝の遺物出土状況 ……18
第17図　第10号溝から出土した遺物 ……19
第18図　第2号土坑、第8号～第11号溝、第11号・第12号ピットの平面および断面図 ……20
第19図　表土層から出土した遺物 ……22
第20図　掛川市内で確認された弥生時代中期の方形周溝墓の位置図 ……25

挿表目次

第 1 表　神子地遺跡周辺の遺跡地名表……2
第 2 表　ピット一覧表 ……21
第 3 表　遺物観察表 ……23
第 4 表　掛川市内の弥生時代中期の方形周溝墓地名表 ……25
第 5 表　今回の調査で確認された遺構一覧表 ……26

写真図版目次

図版 1　神子地遺跡全景
第 1 号方形周溝墓、第 1 号～第 10 号ピット完掘状況

図版 2　第 2 号方形周溝墓、第 12 号溝完掘状況
第 1 号～第 2 号土坑、第 6 号～第 11 号溝、第 11 号～第 12 号ピット完掘状況

図版 3　第 10 号溝の遺物出土状況
第 1 号方形周溝墓から出土した遺物
第 2 号方形周溝墓から出土した遺物

図版 4　第 7 号溝から出土した遺物
第 8 号溝から出土した遺物
第 9 号溝から出土した遺物

図版 5　第 10 号溝から出土した遺物
表土層から出土した遺物

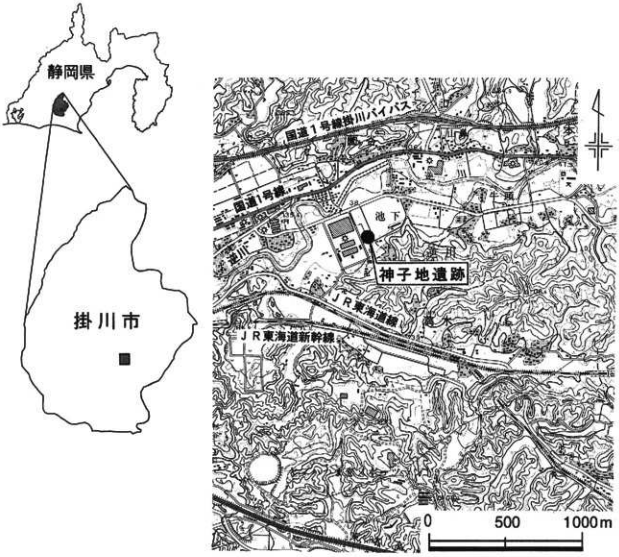
Ⅰ　位置と環境

1．地理的環境

神子地遺跡は静岡県の西部に位置する掛川市の南東部にあたる掛川市逆川（さかがわ）に所在している。遺跡の北側には東から西に向かって逆川が流れており、その北側には国道１号線および国道１号線掛川バイパスが東西に延びている。また、南側には東海道線および東海道新幹線が東西に延びている（第１図）。

遺跡は蛇行しながら西方に流下する逆川の中流域で、逆川によって形成された沖積地上の標高34～35ｍにあり、南東側は丘陵先端部に近接している。

遺跡の周辺の表層地質は、新生代新第三紀中新世の末期に堆積した砂岩と泥岩の互層からなる相良層群が分布し、遺跡はその上に堆積した沖積層の上に立地し、水田として利用されていたところである。



第１図　神子地遺跡位置図

2．歴史的環境

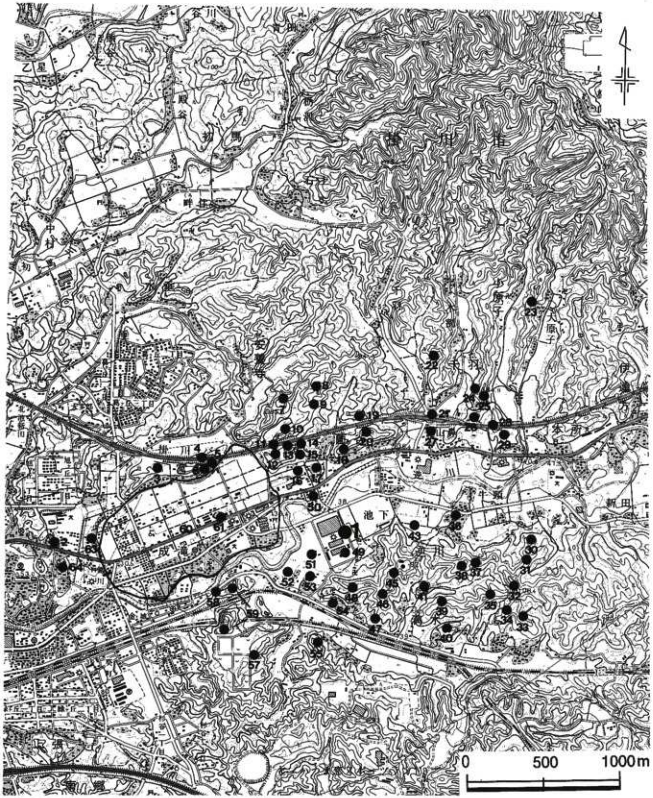
神子地遺跡の周辺の遺跡の分布をみると、第２図に示すように、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く確認されている。

満水の踊原遺跡（第２図45）は昭和60年に調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓、竪穴住居址等が確認されている。同じく**満水の大六山遺跡（第２図59）**は昭和57～58年に調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓、竪穴住居址等が確認されている。

神子地遺跡に近接している、**堂下遺跡（第２図49）・下川原遺跡（第２図50）・天神遺跡（第２図51）・中西遺跡（第２図52）・高畑遺跡（第２図53）**は共に弥生時代後期と古墳時代の前期の遺跡で神子地遺跡と近い時期の遺跡が集中して確認されており、互いの遺跡の関連性も考えられる。

第１表　神子地遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	所在地	番号	遺跡名	時代	所在地
1	**神子地遺跡**	弥生（後）・古墳	逆川字神子地	33	一色古墳群	古墳	満水字一色
2	井屋ノ谷遺跡	弥生（後）・古墳（前）	仁藤字井屋ノ谷	34	山ノ段古墳	古墳	満水字山ノ段
3	宮脇古墳群	古墳	宮脇字垂前	35	平川古墳	古墳	満水字平川
4	山郷山遺跡	弥生～古墳・中～近世	宮脇字五輪田	36	原ノ前遺跡	弥生（後）	逆川字原ノ前
5	山郷山古墳群	古墳	宮脇字五輪田	37	大久保古墳群	古墳	満水字大久保
6	山郷山横穴群	古墳	宮脇字宮下	38	大久保遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字大久保
7	深谷遺跡	弥生（後）～古墳（前）	宮脇字深谷	39	深谷古墳群	古墳	満水字深谷
8	深谷古墳群	古墳	宮脇字深谷	40	原山遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字原山
9	深谷横穴群	古墳	宮脇字深谷	41	山郷古墳群	古墳	満水字踊原
10	山郷横穴群	古墳（後）	宮脇字山郷	42	踊原古墳	古墳	満水字踊原
11	元屋敷	弥生・中世・近世	菌ヶ谷字山郷	43	池向遺跡	弥生（後）	逆川字下池向
12	峯山遺跡	弥生・古墳・古代・中世	菌ヶ谷字峯山	44	前田古墳	古墳	逆川字前田
13	峯山古墳群	古墳	菌ヶ谷字峯山	45	踊原遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字踊原
14	谷通横穴群	古墳（後）	菌ヶ谷字谷通	46	宮ヶ谷狩人塚	古墳	満水字畑ヶ中
15	神明横穴群	古墳	菌ヶ谷字鳥居松	47	正福寺古墳	古墳	満水字畑ヶ中
16	古明遺跡	弥生・古墳・古代	菌ヶ谷	48	南郷古墳群	古墳	満水字南郷
17	寺峯遺跡	弥生（後）・古墳（前）	菌ヶ谷	49	堂下遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字堂下
18	五平屋敷古墳	古墳	菌ヶ谷	50	下川原遺跡	弥生（後）・古墳（前）	菌ヶ谷字下川原
19	御堂ヶ谷横穴群	古墳	菌ヶ谷字堂ヶ谷	51	天神遺跡	弥生（後）・古墳（前）	逆川字神子地
20	正源庵古墳群	古墳	菌ヶ谷	52	中西遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字中西
21	郷下遺跡	弥生（後）	千羽字郷下	53	高畑遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字高畑
22	大谷横穴群	古墳	千羽字大谷	54	畑中遺跡	弥生・古墳・古代	満水字畑中
23	銀谷横穴群	古墳	大原子字銀谷	55	日影谷遺跡	弥生（後）・古墳（前）	満水字日影
24	中屋敷古墳	古墳	千羽字中屋敷	56	蛭田口狩人塚	古墳	満水字蛭田口
25	中屋敷横穴群	古墳	千羽字中屋敷	57	蛭田古墳	古墳	満水字蛭田
26	後沢遺跡	弥生・古墳	千羽字往還北	58	大六山砦	中世	満水字一ノ坪
27	往還北遺跡	弥生（後）～古墳（前）	千羽字往還北	59	大六山遺跡	弥生・古墳	満水
28	宮ノ前遺跡	弥生（後）～古墳（前）	菌ヶ谷字宮ノ前	60	山口遺跡	弥生・古墳・古代	宮脇字宮脇
29	吉松遺跡	弥生（後）	千羽字吉松	61	成滝館	中世	成滝字北大門
30	蔵ヶ谷古墳	古墳	牛頭字蔵ヶ谷	62	堀之内遺跡	弥生（後）・古墳（前）	宮脇字堀之内
31	大薮遺跡	弥生（後）～古墳（前）	牛頭字大薮	63	神明神社古墳	古墳	葛川
32	大薮古墳群	古墳	牛頭字大薮	64	葛川西田遺跡	弥生（後）・古墳（前）	葛川字西田



第２図　神子地遺跡と周辺の遺跡分布図

II　調査の方法と経過

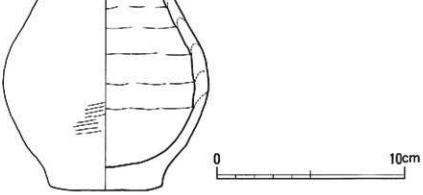
1．調査に至る経緯

平成８年10月、創輝株式会社から工場建設に伴い「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」の照会が掛川市教育委員会に提出された。掛川市教育委員会では、計画地が神子地遺跡内に含まれることから、遺跡の所在確認調査が必要であると回答した。同月に創輝株式会社から提出された「埋蔵文化財所在確認調査依頼書」に基づき、12月に掛川市教育委員会が確認調査を実施した。その結果、遺構と考えられる黒色土の落ち込みと弥生時代中期の壺(**第３図**)、鎌倉時代の陶器片が計画地の南域から出土した。掛川市教育委員会は、この南域での工事については着手前に遺跡の発掘調査が必要になる旨の報告を創輝株式会社に提出した（「埋蔵文化財確認調査完了報告書」平成８年12月)。

平成９年１月８日、掛川市教育委員会と創輝株式会社は、「倉庫と調整池の予定地に遺構を確認したのでこのままの計画だと本発掘調査が必要となる。遺跡を保護する観点から遺跡の存在しない地点に倉庫・調整池を作る計画に変更できないか。本発掘調査となった場合、掛川市教育委員会では対応不可能である。」という内容の協議をした。17日に創輝株式会社から、倉庫については建築しないけれども、調整池の計画は変更できないという連絡が掛川市教育委員会にあった。さらに、20日創輝株式会社から、調整池の計画変更は不可能である。市教育委員会で発掘調査ができないならば、民間の発掘調査機関ではどうかという相談が掛川市教育委員会にあったため、市教育委員会は、この民間の調査機関導入について県教育委員会と協議した。30日、調査対象地の確認、調査時期、調査機関の３点について掛川市教育委員会と創輝株式会社は協議した。

２月12日に県教育委員会も含めて３者で協議を行い、「株式会社静岡人類史研究所に調査を依頼する。調査期間は実働30日、整理調査は６ヵ月間。」という内容で合意した。

創輝株式会社、掛川市教育委員会、株式会社静岡人類史研究所の３者間で「神子地遺跡発掘調査に関する協定書」を締結し（平成９年２月17日)、「神子地遺跡発掘調査連絡会」を設けて発掘調査を実施することとなった。



第３図　確認調査時に出土した遺物

2．調査の方法

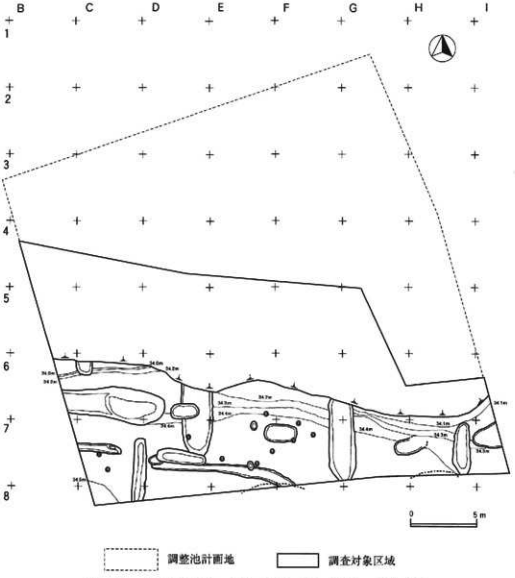
調査に先立ち、事業計画にある調整池の範囲（約830m²）の表土を重機により排除した結果、南半の遺構確認面の地形が北側にかけて急傾斜し、無遺物層が厚く堆積していることが明らかになり、調整池の範囲のうち北半については調査対象区域から除外することとした。

表土を排除した後、全域に磁北の南北を基線とする５ｍ×５ｍのグリッドを設定し、作業員を導入して遺構および遺物の確認作業を実施した。

各グリッドは東西方向は西から東の順にアルファベットのＢ～Ｉ、南北方向は北から南の順に数字の１～８を付し、グリッド名は５ｍ四方の区画の北西角の杭の名称と一致させた。

精査によって遺構および遺物の確認を行い、確認された遺構や遺物については実測図（平面図・断面図・遺物の出土状況図等）を作成し、写真撮影を行った。

なお、遺構および遺物の記録には光波測距儀とパーソナル・コンピュータを組み合わせたトータル・ステーション・システム（遺跡図形処理システムソフト）を導入した。



第４図　神子地遺跡の調査対象区域とグリッド設定図

3．現地調査の経過

現地調査は平成９年２月18日より平成９年３月17日まで実施したが、以下その経過を略記する。

平成９年２月18日（火）～２月21日（金）　重機により表土の除去。

２月20日（木）　作業員を導入し排土用のベルトコンベヤを設置し精査を開始。

２月24日（月）～２月25日（火）　重機により北側の谷状地形を確認する作業を実施。

２月24日（月）～２月28日（金）　精査の結果、溝状遺構、穴状遺構等を確認し、遺構の掘り下げ作業、実測図の作成、写真撮影。

３月３日（月）～３月７日（金）　精査を続行し、溝状遺構の組合せから方形周溝墓が想定され,主体部と思われる土壙の掘り下げ作業を行うとともに、実測図の作成と写真撮影。

３月10日（月）～３月11日（火）　確認された遺構の掘り下げ 作業、写真撮影を 終了し、ラジコンのヘリコプターによる空中写真撮影。

３月12日（水）　遺構の実測図の作成と写真撮影。

３月13日（木）　テストピットを設定して下層の確認。

３月14日（金）　実測図の作成と写真撮影を行い、片づけ。

３月17日（月）　「連絡会」を開催し、現地調査を終了。

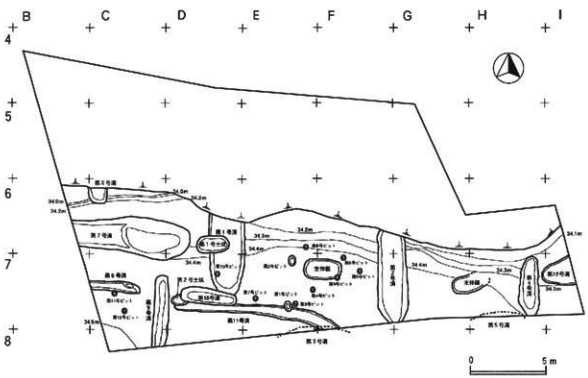
調査の状況

Ⅲ　調査の結果

1．概要

今回の調査は、確認調査の結果を基に、中世と弥生時代の２つの文化層の存在が想定され、さらに事業計画の調整池の全体に遺跡の拡がる可能性もあると考えられたため、重機による表土の除去は調整池の計画地全体を対象として実施した。表土層の排土作業を行った結果、南側では表土層の直下で遺構が確認されたが、北側にかけては地形が急傾斜し、無遺物層が厚く堆積していることが明らかになり、調整池計画地の北半については調査対象から除外することとした。さらに、表土層の直下で確認された遺構は、弥生時代の方形周溝墓と思われる溝等であったため、調査は弥生時代の文化層１面を対象とすることとした。

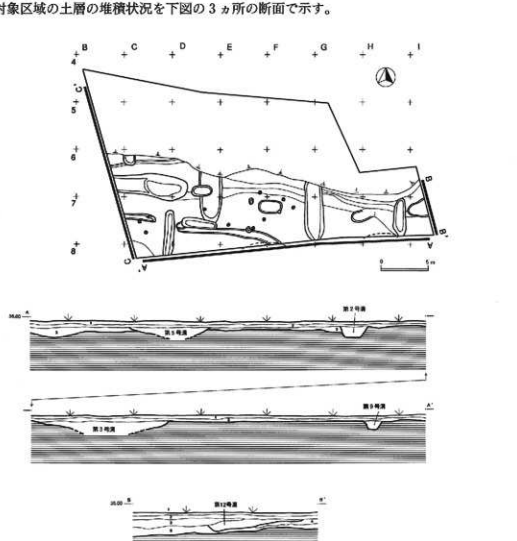
確認された遺構は弥生時代の方形周溝墓２基と溝状遺構12条(方形周溝墓の溝を含む)、土坑２基、穴状遺構（ピット）12基である。遺構は後世の耕作等でかなり削平されており、覆土がほとんど残っておらず、遺物の出土量も少ない状況であった。



第５図　神子地遺跡の遺構全体図

2．土層の状況

調査対象区域の土層の堆積状況を下図の３ヵ所の断面で示す。



第６図　神子地遺跡の土層の堆積状況図

第１層　黒色土層　現在の水田耕作面。
第２層　黒色土層　過去の水田耕作面。
第３層　黒褐色土層　締まりはやや強く、粘性はやや弱い。黄褐色土をブロック状に含む。
第４層　暗褐色土層　締まりはやや弱く、粘性は強い。黄褐色土が点在する。
第５層　黒褐色土層　締まり・粘性ともにやや弱く、黄褐色土のブロックが点在する。
第６層　暗褐色土層　締まり・粘性ともにやや強く、黄褐色土のブロックが点在する。
第７層　黒褐色土層　締まり・粘性ともに強い。

3．遺構と出土遺物

①方形周溝墓

a．第１号方形周溝墓（第７図）

第１号方形周溝墓はD～G－６～８グリッドに位置し、西側溝が第１号溝、南側溝は調査対象区域の南側の壁面で確認された第３号溝、東側溝は第２号溝で、第２号溝を第２号方形周溝墓と共有していると思われる。北側は急傾斜の谷状地形のために、「コの字状」の方形周溝墓と思われる。

周溝墓の規模は溝の内側の東西方向で約8.8mを計り、中央よりやや東側に主体部が確認された。

主体部の平面形状は楕円形を呈し、断面形状は皿状を呈している。長径が234cmで短径が129cm、水田等の耕作でかなり削平されているため、深さは最深部でわずかに６cmである。長軸の方向はN86°　Eを指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒褐色土で締まりはやや強く、粘性はやや弱い。第２層は黒褐色土で締まりは強く、粘性はやや強い。明黄褐色土をブロック状に含んでいる。第３層は灰白色土で締まりは強く、粘性はやや強い。遺物は確認されなかった。

西側溝を構成している第１号溝は、D・E－６・７グリッドに位置し、西側を第１号土坑に、南側を第10号溝によって切られている。また、北側は削平されているために確認できない。確認できた規模は長さ540cmで、最大幅が222cm、深さは最深部で19cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はN３°　Wを指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締まりやや弱く、粘性はやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締まりは強く、粘性はやや強く、径３～10mmの礫を少量含んでいる。第３層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は覆土から土器片が16点出土している。

東側溝を構成している第２号溝は、F・G－６～８グリッドに位置し、南側は調査対象区域外に延びており、北側は削平により消失している。確認できた規模は長さ560cmで、最大幅が192cm、深さは最深部で35cmあり、断面形状は上に開くU字形を呈している。長軸の方向はN３°　Wを指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締まりやや弱く、粘性はやや強く、黄褐色土をブロック状に多く含んでいる。第２層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は覆土から土器片が26点出土している。

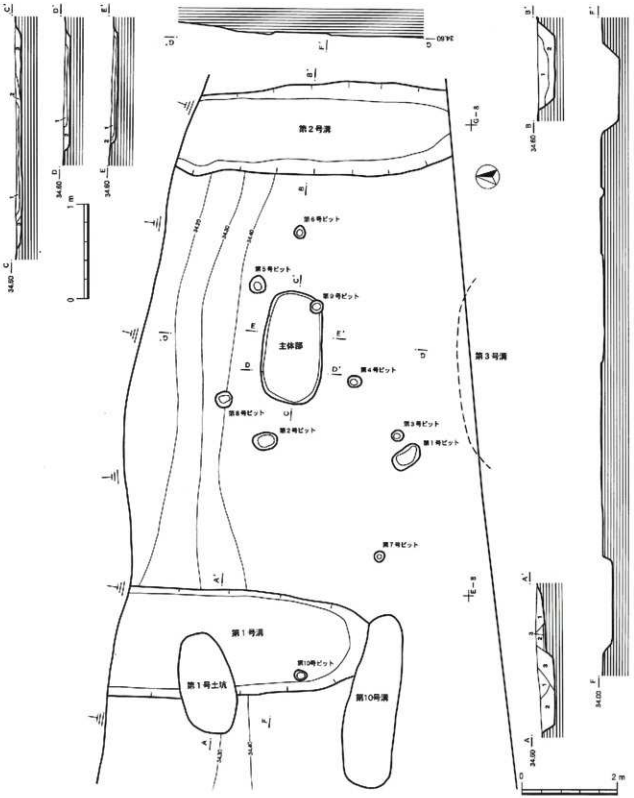
南側溝を構成する第３号溝は、E・F－７・８グリッドに位置し、調査対象区域の南側の壁面で確認された。確認された規模は約340cmで、覆土は１層で、黒色土で締まりやや弱く、粘性はやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。

第１号方形周溝墓の溝から出土した遺物のうち、図示可能な土器片は７点である（**第８・９図**）。

１は第１号溝から出土した細首壷の口縁部から頸部にかけての破片で、頸部にかけて肥厚しており、口縁部はわずかに外反して先端部を丸く収めている。口径は推定で5.4cmあり、器壁の厚さは４mm～９mmある。外面は少し磨滅しているが、縦位のハケ目が施されている。胎土は砂粒をやや多く含んでいて、色調は灰黄色である。

２は第２号溝から出土した壺の頸部の破片で、外面に櫛状施具による刺突紋が施されており、器壁の厚さは６mm～８mmある。胎土は雲母粒、砂粒を含んでおり、色調は浅黄色である。

３は第２号溝から出土した壺の体部の破片である。体部に膨らみをもち、上部がやや鋭く外反している。外面にはベンガラと思われる赤色顔料が塗布され、太い沈線で区画された内側に刺突紋が施されている。器壁の厚さは６mm～９mmある。胎土には赤色・黒色粒を含んでおり、色調はにぶい黄橙色である。



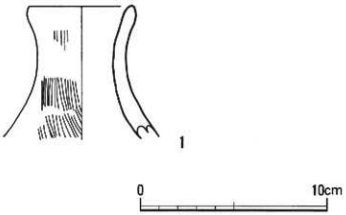
第７図　第１号方形周溝墓、第１号～第10号ピットの平面および断面図

4は第2号溝から出土した台付甕の底部から脚部にかけての破片である。脚部は緩やかに開き、外面には横位、縦位のハケ目が残るが、内面は磨滅が著しい。器壁の厚さは6mm～8mmある。胎土は砂粒を含んでおり、色調は浅黄色である。

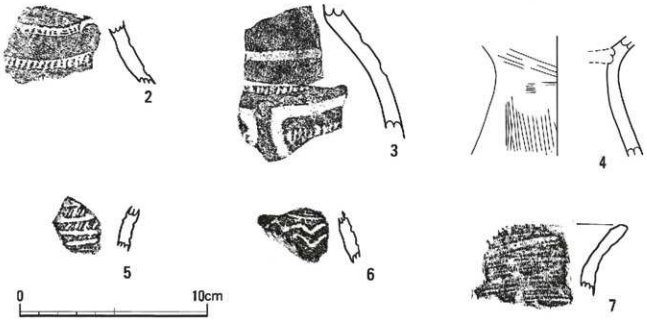
5は第2号溝から出土した壷の頸部の破片で、直立気味に立ち上がっている。外面は沈線と刺突紋が、内面にはナデ調整が施されている。器壁の厚さは5mm～6mmある。胎土は白色・黒色粒を含んでおり、色調は橙色である。

6は2号溝から出土した壷の体部の破片で、外面には横位の直線紋と波状紋が施されている。器壁の厚さは4mm～6mmある。胎土は白色粒を含んでおり、色調はにぶい黄橙色である。

7は第2号溝から出土した甕の口縁部の破片で、頸部から口縁部にかけて大きく外反して、口縁部の先端部を丸く収めている。外面に横位の条痕紋が施されており、器壁の厚さは4mm～7mmある。胎土は黒色粒を含んでおり、色調は浅黄色である。



第8図　第1号方形周溝墓の西側溝（第1号溝）から出土した遺物



第9図　第1号方形周溝墓の東側溝（第2号溝）から出土した遺物

b．第2号方形周溝墓（第11図）

第２号方形周溝墓はＦ～Ｈ－６～８グリッドに位置し、西側溝は第１号方形周溝墓の東側溝（第２号溝）と共有すると思われ、南側溝は調査対象区域の南側の壁面で確認された第５号溝、東側溝は第４号溝で構成されている。北側は第１号方形周溝墓と同様に急傾斜の谷状地形のために、「コの字状」の方形周溝墓と思われる。

周溝墓の規模は東西方向で約7.2mを計り、中央に主体部の掘り方と思われる土壙が確認された。

主体部と思われる土壙は第１号方形周溝墓と同様に上部が水田等の耕作でかなり削平されているため、西側を残すのみである。平面形状は楕円形を呈すると思われ、確認された直径が220cmで短径が105cm、深さは最深部で12cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はＮ69°Ｅを指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでおり、径３～10mmの礫を多く含んでいる。第２層は黒色土で第１層に比べて礫が少ない。第３層も黒色土であるが、第１層より黄褐色土のブロック状に含む量が少ない。遺物は確認されなかった。

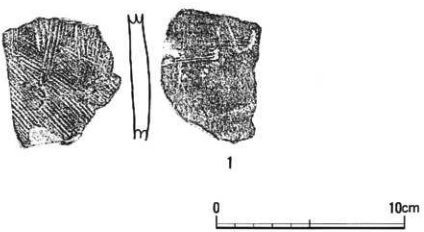
東側溝を構成している第４号溝は、Ｈ－７・８グリッドに位置し、南側は調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ380cmで、最大幅が137cm、深さは最深部で39cmあり、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長軸の方向はＮ３°Ｅを指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締まりやや弱く、粘性は強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。第２層は黒褐色土で締まり・粘性ともにやや強く、径３～10mmの礫を少量含んでいる。第３層は黒褐色土で締まりやや弱く、粘性は強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は覆土から土器片が３点出土している。

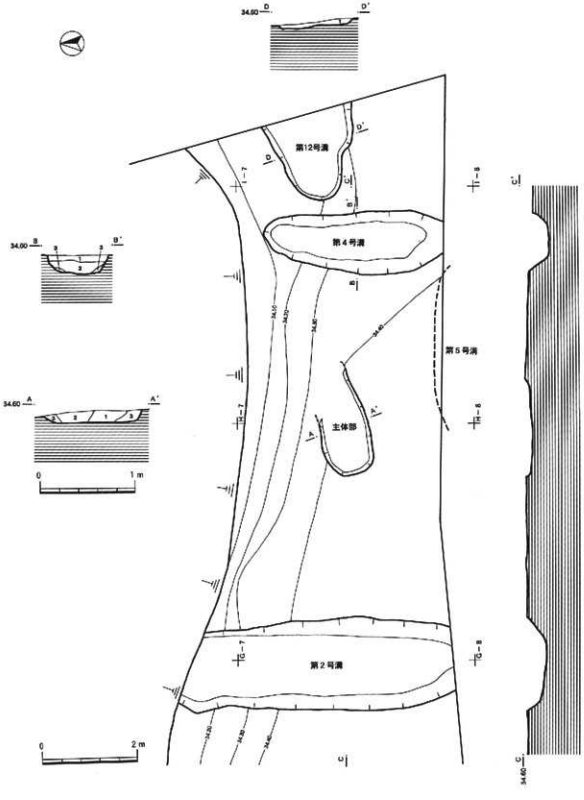
南側溝を構成すると思われる第５号溝は、Ｇ・Ｈ－７グリッドに位置し、調査対象区域の南側の壁面で確認された。確認された規模は約300cmで、覆土は１層で、黒色土で締まりやや弱く、粘性はやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。

第２号方形周溝墓の溝から出土した遺物のうち、図示可能な土器片は１点である（**第10図**）。

１は第４号溝から出土した甕の胴部の破片である。胴部は直立気味である。外面に斜位のハケ目、内面には横位のハケ目が施され、器壁の厚さは７mm～９mmある。胎土は雲母と赤色・白色粒を含んでおり、色調はにぶい黄褐色である。



第10図　第２号方形周溝墓の東側溝（第４号溝）から出土した遺物



第11図　第２号方形周溝墓、第12号溝の平面および断面図

②溝状遺構

a．第６号溝（第13図）

第６号溝はB・C－６グリッドに位置し、北側を削平により消失している。確認できた規模は長さ120cmで、最大幅が120cm、深さは最深部で25cmあり、断面形状は上に開くU字形を呈している。長軸の方向はN５°Wを指している。

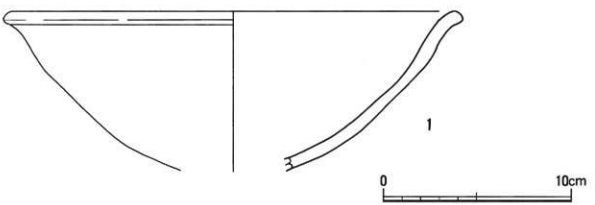
覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締まりはやや弱く、粘性は強い。第２層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄褐色土をブロック状に含んでいる。第３層は黒褐色土で締まりは強く、粘性はやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。遺物は確認されなかった。

b．第７号溝（第13図）

第７号溝はC・D－６・７グリッドに位置し、西側が調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ750cmで、最大幅が267cm、深さは最深部で58cmあり、断面形状は上に開くU字形を呈している。長軸の方向はN77°Wを指している。

覆土は４層に分けられ、第１層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。第２層は暗茶褐色土で締まりはやや強く、粘性はやや弱い。黄白色土をブロック状に含んでいる。第３層は暗茶褐色土で締まり・粘性ともにやや強い。第４層は暗茶褐色土で締まり・粘性ともにやや強く、径約30mmの礫を少量含んでいる。遺物は土器片が12点出土している。このうち図示可能な土器片は１点である（第12図）。

１は第７号溝から出土した高坏の坏部の破片である。内・外面ともに無紋で、体部がやや彎曲しながら大きく開き口縁部で外反している。口縁部の先端は丸く収めている。口径は推定で24.4cmあり、胎土は灰色の小礫径（0.5～３mm）を含んでおり、色調は灰白色である。

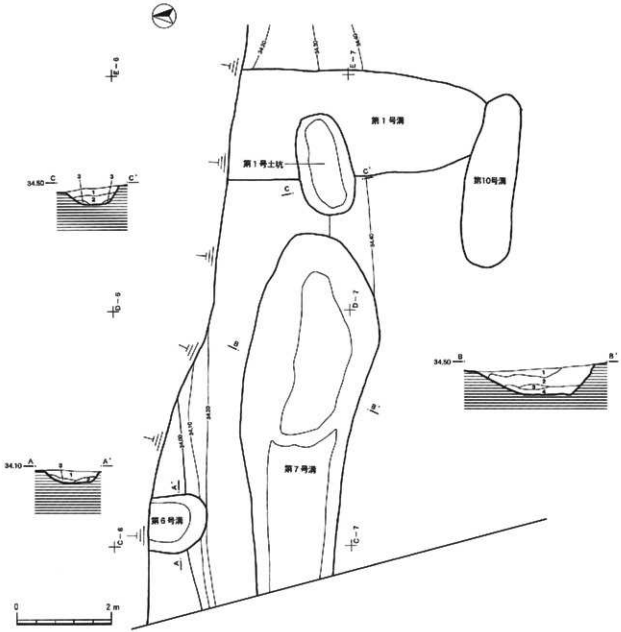


第12図　第７号溝から出土した遺物

c．第８号溝（第18図）

第８号溝はC－７グリッドに位置し、西側が調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ330cmで、最大幅が69cm、深さは最深部で14cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はN77°Wを指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締まりやや弱く、粘性はやや強い。第２層は灰白色土で締まり・粘性ともにやや強い。第３層は灰白色土で締まり強く、粘性はやや強い。遺物は弥生土器片15点、土師器片２点、須恵器片８点、山茶碗・陶器片等が合わせて42点出土している。このうち図示可能な土器片は６点である（第14図）。



第13図　第1号土坑、第6号溝・第7号溝の平面および断面図

1は灰釉陶器の底部の破片で、内・外面にナデ調整が施されており、底部には高台を貼付けている。高台の断面形状は三角形を呈し、高台径は推定で7.6cmある。内・外面に釉がみられる。胎土は白色・黒色粒を含んでおり、色調は灰黄色である。

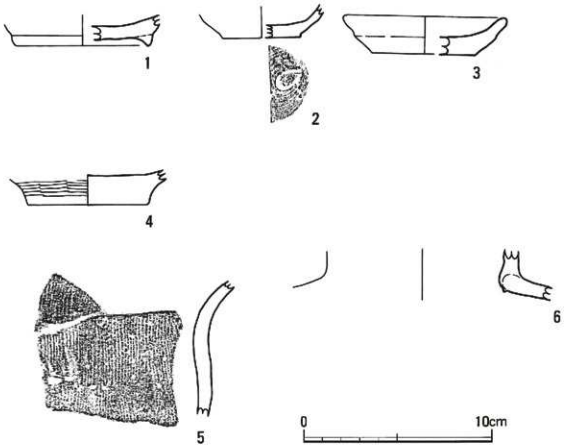
2は小皿の底部の破片で、底径は推定で4cmある。底部には回転糸切り痕があり、内面には緑灰色の自然釉がかかっている。胎土は黒色粒を含んでおり、色調は灰色である。

3は小皿の口縁部から底部にかけての破片で、平底の底部から大きく開きながら立ち上がり、口縁部の先端を丸く収めている。口径は推定で8.6cm、底径は推定で5.5cmある。内・外面ともにナデ調整が施されており、外面の口縁部には灰白色の自然釉が見られる。胎土は精製で、色調はにぶい黄褐色である。

4は弥生土器の壷の底部の破片で、外面には櫛目が施されている。底径は6.4cmある。胎土は赤色・白色粒を含んでおり、色調は浅黄色である。

5は甕の頸部の破片で、胴部は直立気味に立ち上がり、頸部は緩やかに外へ開いている。外面に縦位のハケ目が施されている。胎土は砂粒を含んでおり、色調は灰黄褐色である。

6は壷の頸部の破片で、口縁部に向かって、直線的に立ち上がっている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は精製で色調は灰白色である。



第14図　第8号溝から出土した遺物

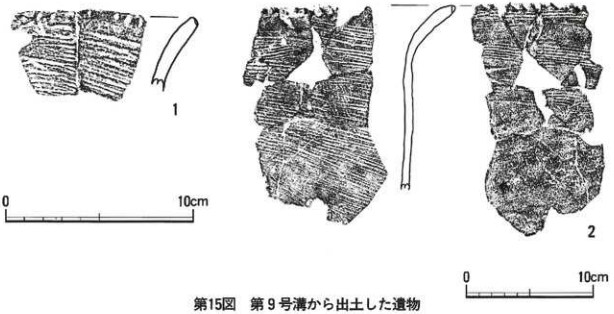
d．第９号溝（第18図）

第９号溝はＤ・Ｅ－７・８グリッドに位置し、南側が調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ470cmで、最大幅が95cm、深さは最深部で36cmあり、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長軸の方向はＮ６°Ｅを指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締まりはやや弱く、粘性はやや強く、明黄褐色土をブロック状に含んでいる。第２層は黒褐色土で締まり・粘性ともにやや強い。遺物は土器片が21点出土しており、このうち図示可能な土器片は２点である（第15図）。

１は甕の口縁部の破片で、やや外反している。口唇部外側にはヘラ状施具によるキザミ目が施されており、外面には斜位の条痕紋が施されている。器壁の厚さは４mm～６mmある。胎土は白色粒を微量に含んでおり、色調は淡黄色である。

２は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反している。内・外面に横位から斜位の条痕紋、口唇部外側にヘラ状施具によるキザミ目が施されている。器壁の厚さは５mm～９mmある。胎土は白色粒を微量に含んでおり、色調は浅黄橙色である。



第15図　第９号溝から出土した遺物

e．第10号溝（第18図）

第10号溝はＤ－７グリッドに位置し、西側で第２号土坑に、南側で第11号溝によって切られている。長さ372cmで、最大幅が110cm、深さは最深部で37cmあり、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長軸の方向はＮ82°Ｗを指している。

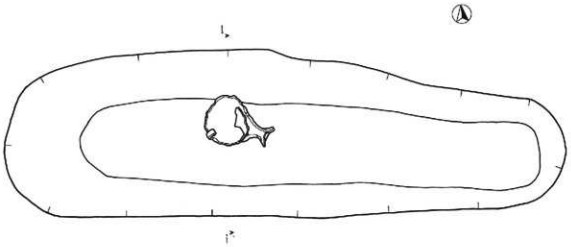
覆土は４層に分けられ、第１層は黒色土で締まりはやや強く、粘性はやや弱い。第２層は黒色土で締まり・粘性ともにやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。第３層は黒色土で締まりは強く、粘性はやや強い。第４層は暗黄褐色土で締まりは強く、粘性はやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。遺物は覆土の第１層から弥生土器片が一括出土しており（第16図）、その他の土器片と合わせて17点出土している。このうち図示可能な土器片は４点である（第17図）。

1は一括出土した壷の口縁部から胴部下半にかけてで、全体の5分の2程度を残している。胴部は下ぶくれである。頸部から口縁部にかけては緩やかに開き、胴部から底部にかけてやや鋭く屈曲している。肩部から胴部にかけては、5本単位で横位の櫛描直線紋を重畳させた後、それを4本単位の縦位の櫛描直線紋によって区画している。縦位櫛描直線紋の上・下部分は左右に丸く流れている。直線紋の下部にはハケ目とヘラミガキが施されている。内面は頸部にナデが施されており、胴部には指頭痕が残っている。胎土は黒色粒を微量に含んでおり、色調は暗灰黄色である。

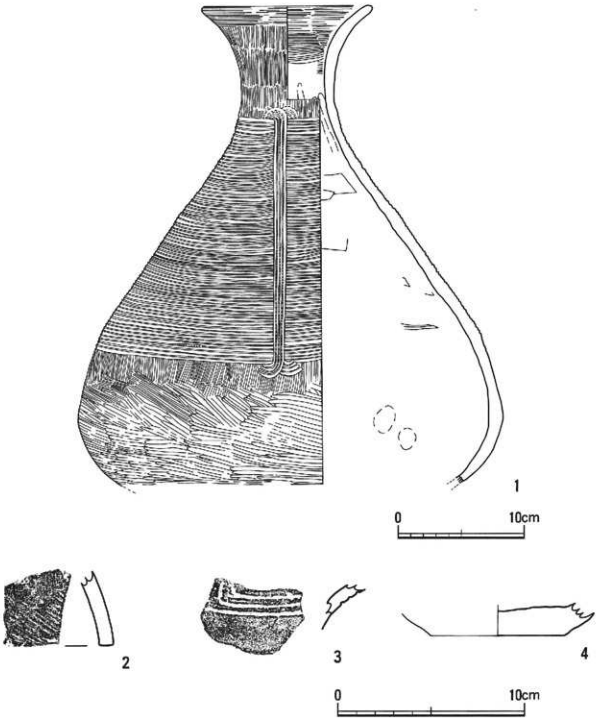
2は台付甕の脚の裾部の破片で、脚部は彎曲気味に開いており、裾部の先端は平らに収めている。外面には斜位のハケ目が施されている。胎土は砂粒、赤色粒を含んでおり、色調はにぶい褐色である。

3は壷の口縁部の破片で、大きく外反している。外面に垂下して横走する幅約2mmの沈線がはしっている。胎土は白色粒を含んでおり、色調は灰色である。

4は壷の底部の破片で、平底の底径は7cmある。内・外面ともに磨滅が著しい。胎土は灰色砂粒を含んでおり、色調は淡黄色である。



第16図　第10号溝の遺物出土状況

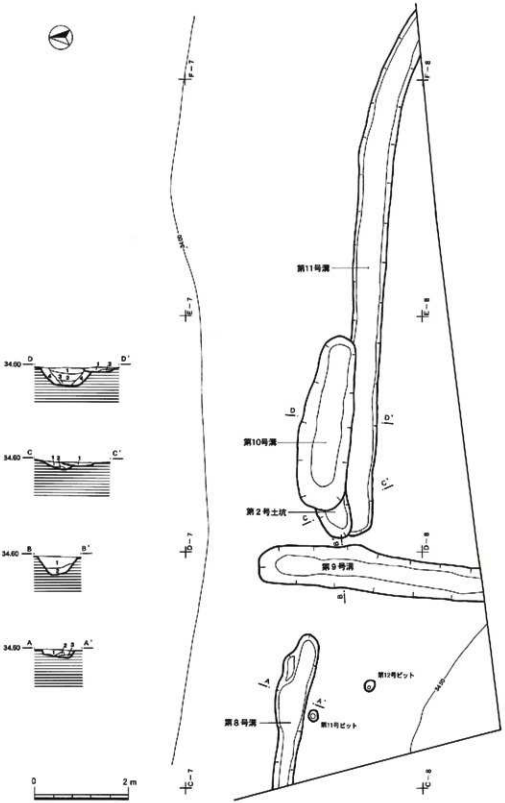


第17図　第10号溝から出土した遺物

f．第11号溝（第18図）

第11号溝はD～F－7グリッドに位置している。西側の第2号土坑と、北西側の第10号溝を切っており、東側が調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ1100cmで、最大幅が360cm、深さは最深部で9cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はN86°Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締まりはやや弱く、粘性はやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。第2層は黄白色土で締まり・粘性ともにやや強い。遺物は確認されなかった。



第18図　第２号土坑、第８号～第11号溝、第11号・第12号ピットの平面および断面図

g．第12号溝（第11図）

第12号溝はH・I－7グリッドに位置し、東側が調査対象区域外に延びている。確認できた規模は長さ180cmで、最大幅が195cm、深さは最深部で8cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はN79°Eを指している。覆土は黒色土が1層で締まりはやや弱く、粘性はやや強く、黄白色土をブロック状に含んでいる。遺物は確認されなかった。

③土　坑

a．第1号土坑（第13図）

第1号土坑はD－6グリッドに位置し、東側で第1号方形周溝墓の西側を構成する第1号溝を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長径が227cmで短径が115cm、深さは最深部で29cmあり、長軸の方向はN78°Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締まりはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土をブロック状に含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締まりは強く、粘性はやや強い。礫を少量含んでいる。第3層は黒色土で締まりはやや強く、粘性はやや弱い。黄褐色土をブロックが点在する。遺物は土器片が1点出土している。

b．第2号土坑（第18図）

第2号土坑はD－7グリッドに位置し、東側で第10号溝を切っており、南側を第11号溝によって切られているが、平面形状は楕円形を呈し、長径が100cmで短径が68cm、深さは最深部で20cmあり、断面形状は皿状を呈している。長軸の方向はN71°Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締まりはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土をブロック状に含んでいる。第2層は暗褐色土で締まりはやや弱く、粘性は強い。遺物は確認されなかった。

④穴状遺構（ピット）

第1号～第10号ピット（第7図）・第11号～第12号ピット（第18図）

今回の調査では、穴状遺構（ピット）が12基確認されたが、規則的な配列もみられず、形状、深さも様々で遺物の出土もなく、他の遺構との関連も不明である。したがって一覧表の掲載にとどめる。

第2表　ピット一覧表

単位：cm

ピットNo.	グリッド	平面形状	長径	短径	深さ	断面形状	覆土	遺物
第1号	E－7	楕円形	66	40	17	上に開くU字形	2層	無
第2号	E－7	楕円形	54	41	13	皿状	2層	無
第3号	E－7	円形	25	23	15	上に開くU字形	1層	無
第4号	E－7	円形	30	26	25	上に開くU字形	1層	無
第5号	F－7	円形	37	36	10	上に開くU字形	1層	無
第6号	F－7	円形	26	23	9	上に開くU字形	1層	無
第7号	E－7	円形	22	21	14	上に開くU字形	1層	無
第8号	E－6	円形	37	36	18	上に開くU字形	1層	無
第9号	F－7	円形	27	26	22	上に開くU字形	1層	無
第10号	D－7	円形	29	26	8	上に開くU字形	1層	無
第11号	C－7	円形	24	22	12	上に開くU字形	1層	無
第12号	C－7	楕円形	26	19	32	上に開くU字形	1層	無

⑤表土層から出土した遺物

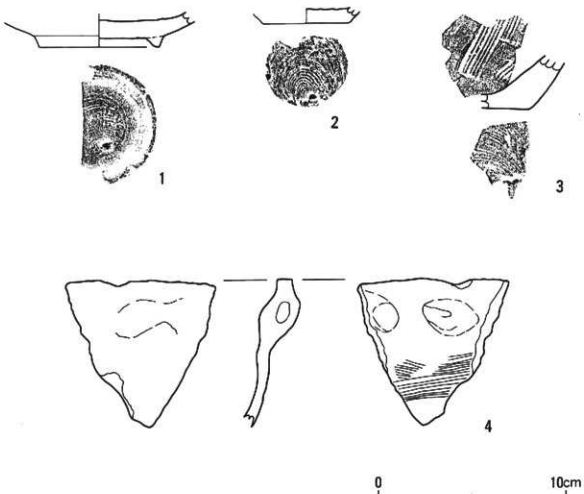
今回の調査で、表土層からは中世以降と思われる44点の土器片が確認されており、このうち図示可能な土器片は次の４点である。

1は付け高台をもつ山茶碗の底部の破片で、体部は緩やかに内彎している。外面には回転糸切り痕がある。付け高台の断面形状は三角形を呈し、高台径は推定で6.4cmある。胎土は精製で、色調は灰白色である。

2は小皿の底部の破片で、外面には回転糸切り痕がある。底径は推定は4.6cmある。胎土は精製で、色調は灰色である。

3は擂鉢の底部の破片で、体部は大きく開いて直線的に立ち上がっている。平底の底部の外面には回転糸切り痕がある。胴部の内面には６本単位の擦り目が施され、内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は黒色粒.白色を含んでおり、色調は黄橙色である。

4は内耳鍋の口縁部から胴部にかけての破片で、外面にススが付着している。口唇部は平らで、胴部は内・外面ともに指押さえの跡があり、内耳の内部には棒状施具で彫り込んだと思われる孔がある。内耳の下側には横位のハケ目が施されている。胎土は白色粒を含んでおり、色調は浅黄色である。



第19図　表土層から出土した遺物

第３表　遺物観察表

図中番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径 器高 底径 (括弧内は推定値)	形態	製作技法	胎土	焼成	色調	部位
8-1	1号溝	縄線巻	(5.4) - -	胴部から口縁部にかけてわずかに外反する。胴部にかけてやや肥厚。	外面に縦位のハケ目。	砂粒やや多く含む	やや良	灰黄色 Hue2.5Y	口～体部
9-2	2号貯	壺	- - -		横状施文による刺突紋。	雲母、砂粒含む	良	浅黄色 Hue2.5Y	頸部
9-3	2号貯	壺	- - -	膨らみをもつ体部。	太い沈線で区画された内側に刺突紋が見られる。	赤・黒色粒含む	良	にぶい黄橙色 Hue10YR	体部
9-4	2号貯	台付甕	- - -	緩やかに開く脚部。	外面横位、縦位のハケ目。内面摩滅。	砂粒少量含む	やや良	浅黄色 Hue10YR	脚部
9-5	2号貯	壺	- - -	直立気味に立ち上がる。	外面に沈線と刺突紋。内面にナデ。	白・黒色粒含む	やや良	橙色 Hue7.5YR	頸部
9-6	2号貯	壺	- - -		外面に直線紋と波状紋。	白色粒含む	やや良	にぶい黄橙色 Hue10YR	体部
9-7	2号貯	壺	- - -	やや大きく外反し、端部を丸く収める。	外面に横位の条痕紋。	黒色粒含む	やや良	浅黄色 Hue2.5Y	口縁部
10-1	4号溝	壺	- - -	直立気味の胴部。外面黒色化。	外面斜位、内面横位のハケ目。	赤、白色粒、雲母含む	良	にぶい黄橙色 Hue10YR	胴部
10-2	7号溝	高杯	(34.2) - -	やや内傾しながら大きく外へ開く。口縁部を外反させ端部を丸く収める。	外、内面とも無文。	灰色小礫径6.5～3mm含む	良	灰白色 Hue2.5Y	口～体部
10-3	8号溝	炭焼陶器	高台は三角形状を呈す。 - (7.6)	外、内面ともにナデと施釉。	外、内面ともにナデと施釉。	白、黒色粒含む	良	黄灰色 Hue2.5Y	胴～底部
10-4	8号溝	山茶碗小皿	- - (4.0)	底部回転糸切り痕。	底部回転糸切り痕。内面に緑灰色の自然釉。	黒色粒含む	良	灰白色 Hue5	胴～底部
10-5	8号溝	山茶碗小皿	(8.8) - (3.5)	平底の底部から立ち上がり端部を丸く収め、外側に縁をもつ。	底部回転糸切り痕。外内面ともナデ調整。外面に緑灰に灰白色の自然釉付着	雲母	良	にぶい黄橙色 Hue5Y	口～底部
10-6	8号溝	壺？	- - 6.4	底部厚く、平底。	外面、横位のケシ目。	赤、白色粒 Hue10YR	やや良	浅黄橙色 Hue10YR	胴～底部
10-7	8号溝	皿	- - -	直立気味に立ち上がり、胴部から緩やかに内へ開く。	外面、横位のハケ目がわずかに残る。	砂粒含む	良	灰黄褐色 Hue10YR	皿～胴部
10-8	8号溝	壺	- - -	口縁部は直線的に立ち上がる。	外、内面ともナデ。	雲母	良	灰白色 Hue2.5Y	頸部
10-9	9号溝	壺	- - -	口縁部はほぼ外に外反。	外面に横位の条痕紋。端面にはキザミ目。	白色粒微量含む	良	黒褐色 Hue2.5Y	口縁部
10-10	9号溝	壺	- - -	胴部はほぼ直上して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。	外、内面に横位の条痕紋。口縁端部にキザミ目。	白色粒微量含む	やや良	浅黄橙色 Hue10YR	口～胴部
10-11	10号溝	皿	(4.5 (43.0)	胴部から口縁部にかけて緩やかに開く。胴部は下ぶくれ。胴部から底部にかけてやや膨出している。	外面15本単位で横位の擬圧痕紋と、4本単位で縦位の擬圧痕紋。胴部下部にヘラミガキ。	黒色粒微量含む	良	明灰黄色 Hue2.5Y	口～胴部
10-12	10号溝	台付甕	- - -	内傾気味に開く脚部。端部は平らかに収められている。	外面に斜位のハケ目。	雲母、赤色粒含む	良	にぶい橙色 Hue7.5YR	脚部
10-13	10号溝	壺	- - -	外反する口縁部と思われる。	外面に櫛下して横走する。幅約2mm の沈線がはしる。	白色粒含む	良	灰白色 Hue2.5Y	口縁部
10-14	10号溝	壺	- - 7.0	平底。	外内面ともに摩滅著しい。	灰色砂粒含む	不良	黄灰色 Hue2.5Y	底部
10-1	表土	山茶碗	- - 底台径(5.4)	体部はやや内傾して立ち上がる。高台は三角形状を呈す。	底部回転糸切り痕。	雲母	良	灰白色 Hue7.5Y	底部
10-2	表土	山茶碗小皿	- - 4.8	平底。	底部回転糸切り痕。	雲母	良	灰色 HueN	底部
10-3	表土	瓶類	- - -	体部、底部内に開く。	内面に6本単位の指ヶ目。底部回転糸切り痕。	黒、白色粒含む	良	黄褐色 Hue7.5YR	底部
10-4	表土	土師器内耳鍋	- - -	口縁部のみ残存、口縁部、わずかに外反する。外面にススが付着。	内面を静状工具による刺突後、面押さえ。	白色粒含む	やや良	浅黄色 Hue2.5Y	口縁部

Ⅳ まとめ

今回の調査で確認された遺構は方形周溝墓（主体部の掘り方と思われる土壙を確認）２基と溝状遺構12条（方形周溝墓の溝５条を含む）、土坑２基、穴状遺構（ピット）12基である。

このうち、弥生時代の遺構と想定できるものは、出土した遺物から方形周溝墓２基、溝状遺構８条（方形周溝墓の溝５条を含む）である。

方形周溝墓について

２基の方形周溝墓は、いずれも谷側の溝を省略した形と思われる「コの字状」を呈している。なお、両周溝墓の間にあたる第２号溝は主体部の掘り方と思われる土壙の位置と他の溝の配置からみて、両者の周溝墓に共有する溝と考えられる。

主体部の掘り方と思われる土壙は、上部がかなり削平を受けており、覆土がほとんど残っておらず、遺物も確認されなかったが、周溝を構成している溝から出土した遺物をみると、白岩式および嶺田式に近い土器型式がみられることから、方形周溝墓の年代は弥生時代の中期後半と推定される。

溝状遺構について

弥生時代の遺構と想定される溝のうち、第10号溝の覆土中からは、底部以外の器形が判明できる壺形土器が出土しており、白岩式に近い土器型式と思われ、方形周溝墓と同時期の溝と考えられる。

また、第８号溝は弥生土器片・須恵器片や中世以降の山茶碗・陶器等が混在して出土している。第11号溝は遺物が出土しておらず、覆土も攪乱されており、かなり新しい時期の溝と思われる。なお、第６号溝は遺物が出土していないが、覆土の状態が第７号・第９号溝に類似しており、同時期の溝とも考えられる。第12号溝は遺物は出土していないが、遺跡の東側の断面からみると古い溝と考えられる。

土坑について

第１号土坑は第１号溝を切っており、遺物も弥生土器片が１点出土しているのみで、確実に弥生時代の遺構とは断定できない。

第２号土坑は第10号溝の上面を切り、第11号溝に切られているが、遺物が出土しておらず、覆土の状況からみても時期の推定は不可能である。

穴状遺構（ピット）について

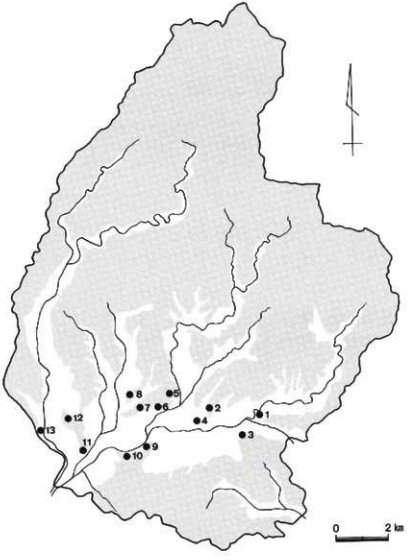
穴状遺構（ピット）は12基確認されたが、規則的な配列もみられず、形状、深さも様々で遺物の出土もなく、他の遺構との関連も不明である。

いずれの遺構も確認面の上部が後世の耕作等でかなり削平されており、覆土もほとんど残っておらず、遺物の出土量も少ない状況であったが、方形周溝墓が確認され、さらに遺跡の拡がりも調査対象区域の南・東・西側に想定されることが判明した。したがって、今回の調査結果からみると、神子地遺跡は弥生時代中期後半の方形周溝墓群を形成している可能性がある遺跡と考えられる。また、表土層から出土した遺物からみて、古墳時代から中世以降にかけて集落が存在していた可能性も考えられる。

なお、現在までに掛川市内の遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓は神子地遺跡を含めて13遺跡で確認されている（第４表・第20図）。

第４表　掛川市内の弥生時代中期の方形周溝墓地名表

No.	遺跡名	時　期	基数	立地	No.	遺跡名	時　期	基数	立地
1	**神子地遺跡**	**白岩**	**2**	**沖積地**	8	六ノ坪Ⅱ遺跡	白岩	5	丘陵
2	大ヶ谷遺跡	白岩	4	丘陵	9	堀ノ内遺跡	嶺田～白岩	8	丘陵
3	大六山遺跡	中期		丘陵	10	本村遺跡	嶺田	2	丘陵
4	掛川城址	白岩	3	丘陵	11	向山遺跡	白岩	3	丘陵
5	原遺跡	嶺田～白岩	6	丘陵	12	岡津原Ⅲ遺跡	白岩	7	丘陵
6	不動ヶ谷遺跡	白岩	14	丘陵	13	山下遺跡	嶺田～白岩	※29	丘陵
7	六ノ坪遺跡	嶺田	3	丘陵	※は後期の方形周溝墓を含む数				



第20図　掛川市内で確認された弥生時代中期の方形周溝墓の位置図

第５表　今回の調査で確認された遺構一覧表

・方形周溝墓の規模と主体部の状況　　※（ ）は確認できた部分の規模　　単価：cm

遺構名	グリッド	規　模			主体部			長軸の方向	主体部断面形状	覆土	遺物
第１号方形周溝墓	D～G－６～８	東西880	234	129	6	N86° E	皿状			３層	無
第２号方形周溝墓	F～H－６～８	東西720	(220)	105	12	N69° E	皿状			３層	無

・溝状遺構　　※（ ）は確認できた部分の規模　　単価：cm

遺構名	グリッド	長さ	幅	深さ	長軸の方向	断面形状	覆土	遺物	備　考
第１号溝	D・E－６・７	(540)	222	19	N３° W	皿状	３層	16点	第１号方形周溝墓西溝
第２号溝	F・G－６～８	(560)	192	35	N３° W	上に開くU字形	２層	26点	第１・２号方形周溝墓共有溝
第３号溝	E・F－７・８	(340)	－	－	－	－	１層	無	第１号方形周溝墓南溝
第４号溝	H－７・８	(380)	137	39	N３° E	上に開くU字形	３層	3点	第２号方形周溝墓東溝
第５号溝	G・H－７	(300)	－	－	－	－	１層	無	第２号方形周溝墓南溝
第６号溝	B・C－６	(120)	120	25	N５° W	上に開くU字形	３層	無	
第７号溝	C・D－６・７	(750)	(267)	58	N77° W	上に開くU字形	４層	12点	
第８号溝	C－７	(330)	69	14	N77° W	皿状	３層	42点	
第９号溝	D・E－７・８	(470)	95	36	N６° E	上に開くU字形	２層	21点	
第10号溝	D－７	372	110	37	N82° W	上に開くV字形	４層	17点	一括土器出土
第11号溝	D～F－７	(1100)	60	9	N86° W	皿状	２層	無	
第12号溝	H・I－７	(180)	(195)	8	N79° E	皿状	１層	無	

・土　坑　　※（ ）は確認できた部分の規模　　単価：cm

遺構名	グリッド	平面形状	長径	短径	深さ	長軸の方向	断面形状	覆土	遺物
第１号土坑	D－６	楕円形	227	115	29	N78° E	上に開くU字形	３層	1点
第２号土坑	D－７	楕円形	(100)	68	20	N71° E	皿状	２層	無

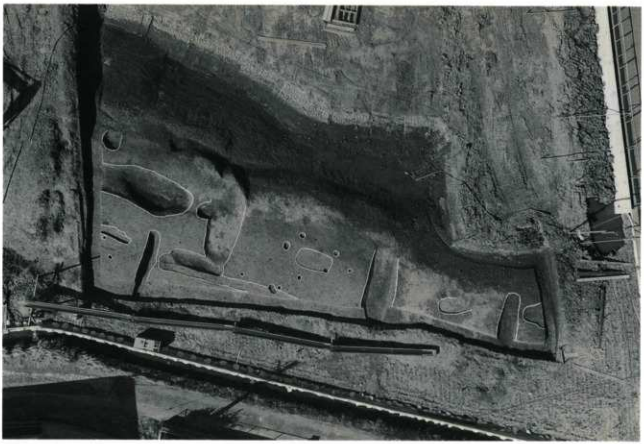
・ピット（第２表に示してある）

参考文献

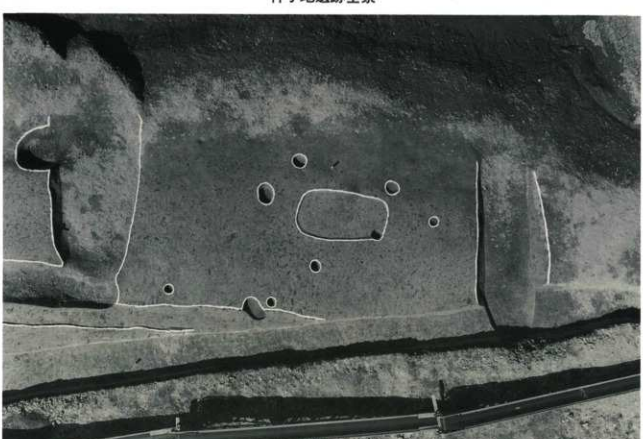
・田辺昭三　1972「白岩下流遺跡報告」
・山岸良二　1981「方形周溝墓　考古学ライブラリー８」
・掛川市・袋井市教育委員会　1984「山下遺跡」
・鈴木敏則　1988「転機２号」
・静岡県教育委員会　1989「静岡県文化財地名表・地図」
・静岡県　1992「静岡県史　資料編３」
・掛川市教育委員会　1992「岡津原Ⅲ遺跡」
・静岡県埋蔵文化財調査研究所　1987「研究紀要Ⅱ」
・掛川市教育委員会　1993「掛川市遺跡地名表・地図」
・掛川市教育委員会　1996「安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡」
・大川清・鈴木公雄・工楽善通　1996「日本土器辞典」

写真図版

図版1



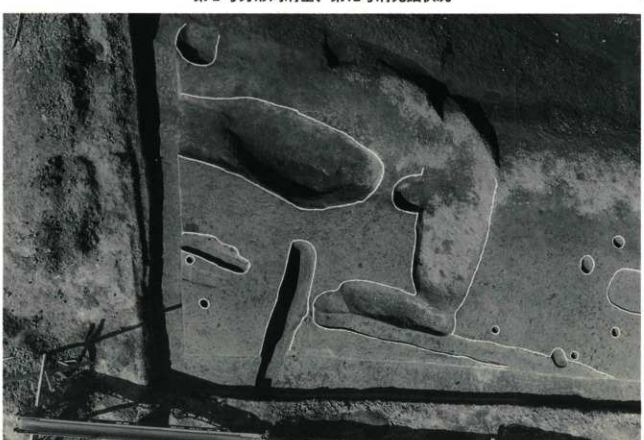
神子地遺跡全景



第1号方形周溝墓、第1号～第10号ピット完掘状況

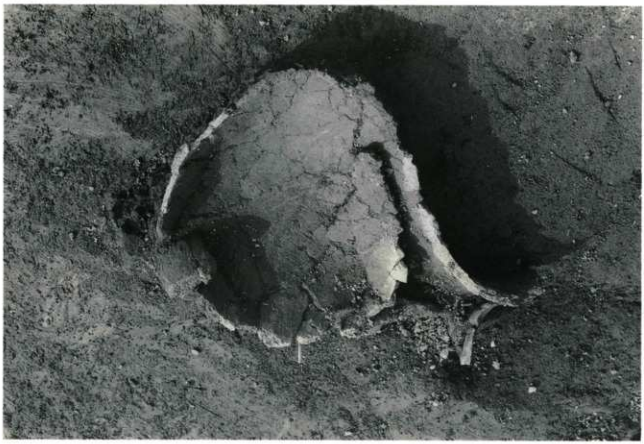
図版 2

第 2 号方形周溝墓、第12号溝完掘状況



第 1 号～第 2 号土坑、第 6 号～第11号溝、第11号～第12号ピット完掘状況

図版 3



第10号溝の遺物出土状況

第 1 号方形周溝墓から出土した遺物

第 2 号方形周溝墓から出土した遺物

図版 4

第 7 号溝から出土した遺物

第 8 号方溝から出土した遺物

第 9 号溝から出土した遺物

図版5

第10号溝から出土した遺物

表土層から出土した遺物

報告書抄録

ふりがな	みこじいせきはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	神子地遺跡発掘調査報告書		
副書名	創輝株式会社工場用地拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名		シリーズ番号	
編著者名	前田　庄一（掛川市教育委員会）、片平　剛・松岡美代子（静岡人類史研究所）		
編集機関	掛川市教育委員会		
所在地	〒436　静岡県掛川市長谷701番地ー1　℡0537-21-1158		
発行年月日	西暦1997年9月30日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒		㎡	
みこじ 神子地 いせき 遺跡	しずおかけん かけがわし 静岡県　掛川市 さかがわ 逆川	22213	197	34° 46′ 32″	138° 2′ 52″	1997年 2月18日～ 1997年 9月30日	400	創輝株式会社工場用地拡張事業に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神子地遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器	

静岡県掛川市

神子地遺跡発掘調査報告書

創輝株式会社工場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年9月15日印刷
平成9年9月30日発行

編集・発行：掛川市教育委員会
〒436　掛川市長谷701番地ー1
TEL 0537-21-1158
印刷：黒船印刷株式会社